

乳児保育における模擬保育の試み 1

— 卒業生の課題を手がかりに —

The importance of simulated infant-care in preparing for nursery school teaching :
Research and survey results Part1.

加藤 房江
(こども学科 専任講師)

要旨 本学の卒業生が、保育現場において、どのような状況であるのか、仕事に対する困難さや課題はどのようなものがあるのか、質問紙調査を実施した。「乳児保育」における子ども理解や保育技術の向上など、保育の専門性を高める教育の効果を探る前段階として、質問紙調査結果から困難さや課題を感じる内容を洗い出した。得られたデータを今後の授業に生かすため、有用な保育実践の模擬保育のテーマについて検討をし、模擬保育を行うこととした。

【キーワード：乳児保育 模擬保育 保育実習】

1. はじめに

1. 保育専攻学生を取り巻く社会的状況

2015から本格施行した「子ども・子育て支援新制度」では、子ども子育て新システムの制度実施等に伴う地域の実情に応じた保育等の量的拡充、幼保一元化などの機能強化に力が入れている。幼稚園と保育園の垣根が取り払われ、今まで別々の機関として勤務していた保育者が、同一の施設体系で仕事に従事する可能性が高くなり、乳児保育に対するニーズも拡大している。

保育所保育指針解説書(2008)の第6章¹⁾「保護者に対する支援」には、『保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章(総則)に示されたように、その特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、積極的に取り組むことが求められる。』と謳われている。また、同第7章²⁾「職員の共通理解と協調性」には、『保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協調性を高めていくこと。』と謳われている。

多様な役割が要求される社会的状況において、

保育専攻学生は、今まで以上に乳児保育にかかわる保育者が増え、それに対する専門性と対応が必要になっている。

現在勤務している短期大学は、幼稚園教諭二種免許と保育士資格の取得を目的としている。中でも短期大学での保育者養成には、即戦力となる初任保育者の養成が求められている。

2. 「乳児保育」の先行研究との関連

三好・石橋(2006)³⁾は、保育実践力を改善するための保育者養成の手がかりとして、初任保育者の担当クラスの現状と子どもの遊びに関わるときの保育者の問題意識を調査した。初任保育者の担当する保育では、73%が0歳から2歳児クラスの乳児を複数の保育者と経験している実態をあげている。養成校を卒業し、先輩保育者に見守られながら、0歳児から2歳児クラスを担当し、保育者としての経験を深めていくことは、容易に想像できることである。筆者が保育所に勤務していたときも、初任保育者は、多くの場合乳児クラスに配属になり、先輩保育者から乳児保育の重要性や援助の実際を学び、園の文化とともに一年ずつ成長していく子ども達の姿を捉え、一人前の保育者へと成長していくプロセスがある。

次に「乳児保育」の教科であるが、保育士養成課程の必修科目として、「保育の内容・方法に関する科目」として位置づけられ、演習で2単位と定

められている。保育者の質の向上や専門性の向上が求められている中で、演習による効果的な授業が保育者養成校で模索されている。

野中(2008)⁴⁾は、「乳児保育Ⅰ」(1年後期)で基礎を学んだ学生は「乳児保育Ⅱ」にどのような学びを求めているか質問紙調査にて、学習課題を探った。具体的事例をあげる事で授業と実習経験とを結びつけて学べ、イメージしやすいと述べている。

船越(2010)⁵⁾の研究として、保育実習を終了した2年生63名に乳児保育0~3歳までの発達区分に分け保育内容をコード化した質問紙調査を実施し、どの程度乳児とかかわりを持ったか分析を行った。モデル人形や、視覚的教材を通して発達、保育の実践と理論を結びつけることが必要であることが示唆された。演習による実際の保育をイメージしやすい保育内容や指導の充実、工夫が必要であるといえる。

本研究では、卒業生の保育現場で仕事上の困難さ・課題を読み取り、それを踏まえた保育実践がイメージしやすい形で授業を行うことで、保育者として子ども理解を深め、「乳児保育」における模擬保育授業の教育の効果を探るものである。また、この結果をもとに保育者養成に対する指導のあり方を探るきっかけとしたい。

II. 方法

1. 本学の卒業生の保育現場における実態の調査。

1) 調査対象

毎年、卒業生の同窓会の意味合いを持つ、ホームカミングデイが8月に開催される。その際に質問紙調査を実施した。平成26年度に卒業した卒業生64名、それ以前に卒業した卒業生16名の計80名である。

2) 調査内容

「卒業して何年目であるか」「勤務先の調査と配属クラスの担当年齢」「大学時代にもっと学んでおけばよかった内容」「就職までにやっておけばよかった内容」54項目について、質問紙調査を実施した。項目の作成にあたっては、保育所保育指針解説書や先行研究、近年本邦で出版されている「乳児保育」の解説書を参考に作成した。上位概念として、「発達に関すること」「安心・安全に関すること」「食に関すること」「排泄に関すること」「清

潔に関すること」「環境整備に関すること」「保護者との連携」「教育・保育課程に関すること」「遊びに関すること」「その他」の項目である。各質問項目につき「大学時代にもっと学んでおけばよかった内容、就職までにやっておけばよかった内容」に○として1点、「特に、大学時代にもっと学んでおけばよかった内容、就職までにやっておけばよかった内容」に◎として2点での評定を求めた。また、「上記以外も、困ったこと、これから取り組もうとしていることなど」について自由記述を求めた。

2. 得られたデータ検討

特に困難さや課題、保育現場でも対応の多い場面を模擬保育の課題とする。

III. 結果および考察

1. 本学の卒業生の保育現場における状況の調査結果(平成27年8月)。

1) 「卒業して何年目ですか。」の内訳

1年目の卒業生が64名、それ以前に卒業した卒業生は16名となっており、1年目の卒業した学生が多く80%を占めている。

2) 勤務先の調査

保育所に勤務している卒業生が、1年目では32名、それ以前に卒業した卒業生は10名となっており、計42名である。

幼稚園に勤務している卒業生は、1年目では19名、それ以前に卒業した卒業生5名となっており、計24名である。

認定こども園に勤務している卒業生は、1年目の6名のみである。また、保育所・幼稚園・認定こども園いずれも勤務していない卒業生は7名である。

3) 配属クラスの担当年齢

保育所に勤務している卒業生で、1年目の3歳児未満の担当は27名であり、それ以前に卒業した卒業生の担当は4名の計31名である。3歳以上の担当は1年目で5名おり、それ以前に卒業した卒業生は、5名の計10名である。

幼稚園に勤務している卒業生は3歳児が一番多く、11名である。

認定こども園に勤務している卒業生の3歳児未満の担当は4名であり、3歳以上の担当は、2名である。(参加者全員の担当年齢を図1に示す)

参加者全員では、3歳未満児を担当している卒業生と、3歳以上児を担当している卒業生は、ほぼ半数の割合である。(参加者全員の担当年齢の割合を図2に示す)

卒業生1年目のみでは、54%の半数以上が3歳未満児を担当しており、やや高い割合であることが分かった。(卒業生1年目の担当年齢を図3・その割合を図4に示す)

これは、勤務年数を重ねると3歳未満児から、3歳以上児を担当していく割合が増える傾向にあるものと予想される。

また、平成26年度の就職内定者145名の内訳は、幼稚園が55名、保育所が74名、施設が5名、小学校が2名、学童保育3名、企業等が6名となっている。(平成26年度の就職内定者を図5に示す)

今回のホームカミングデイにおいて、参加していない学生もあり、保育所勤務が平成26年度の就職内定者の幼稚園と保育所の比較においても、57%を占めていることから、3歳未満児の担当は、もっと多いのではないかと予想される。このことから、保育者養成において、3歳未満の子ども理解や保育の質の向上、即戦力となる初任保育者の養成が、求められるといえる。

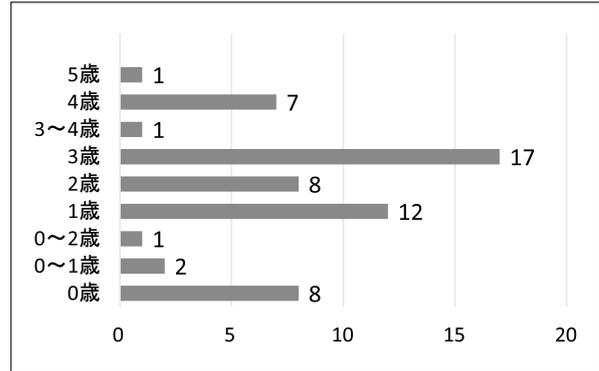


図3 卒業生1年目の担当年齢 n=64

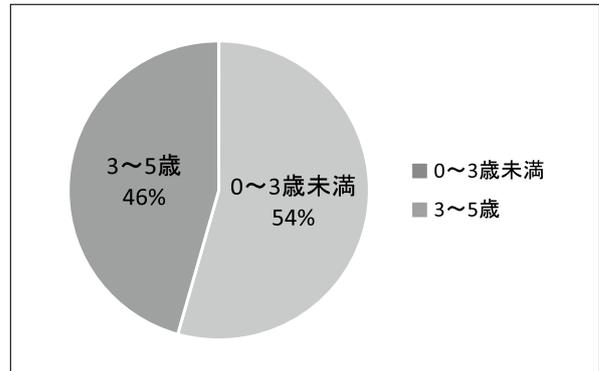


図4 卒業生1年目の担当年齢の割合 n=64

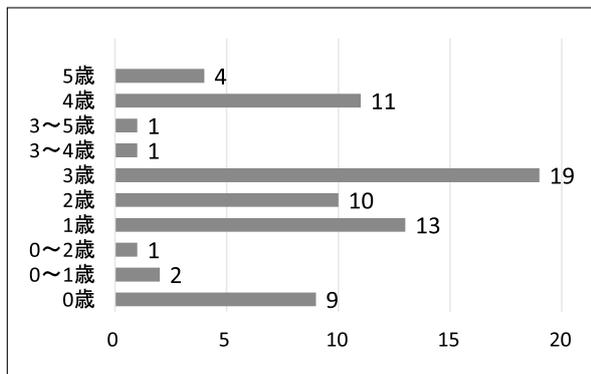


図1 参加者全員の担当年齢 n=80

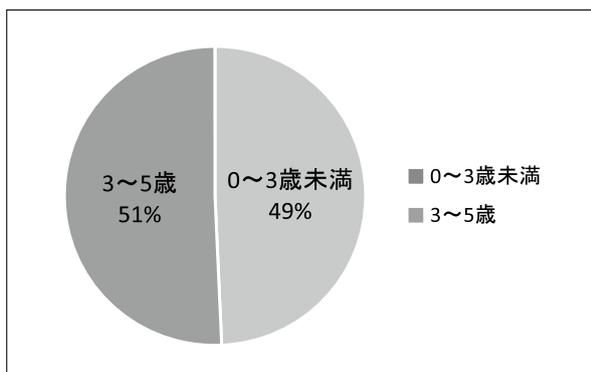


図2 参加者全員の担当年齢の割合 n=80

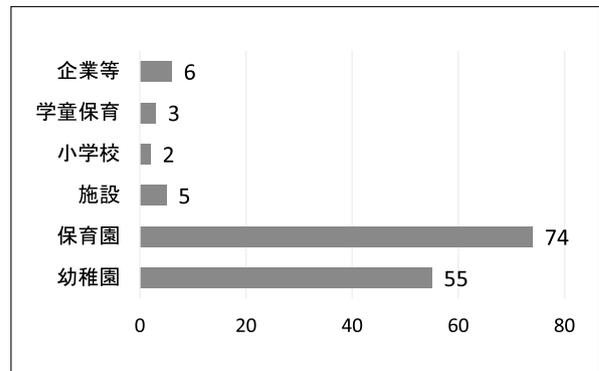


図5 H26年 就職内定者 n=145

4) 乳児保育の困難さ・課題についての調査

大学時代にもっと学んでおけばよかった内容、就職までにやっておけばよかった内容に焦点を当て、保育者としての困難さや課題を抱えているのか調査を実施した。

上位概念として、「発達に関すること」「安心・安全に関すること」「食に関すること」「排泄に関すること」「清潔に関すること」「環境整備に関すること」「保護者との連携」「教育・保育課程に関すること」「遊びに関すること」「その他」があり、点数が高いほど、困難さや課題を表している。

表1 「乳児保育」の困難さ・課題

発達過程に関すること		点数	着脱に関すること		点数
1	各発達段階の乳児理解について	21	28	発達に合わせた着脱の援助	12
2	声がけの仕方	18	29	衣類のたたみ方	4
3	注意の仕方	22	30	ボタンの留め方・靴の履かせ方	9
4	その他	0	31	その他	0
安心・安定に関わること			環境整備に関すること		
5	泣く原因・あやし方	12	32	年齢に合わせた環境整備	14
6	抱っこ・おんぶの仕方	9	33	整頓・清掃	4
7	人見知りの対応	11	34	その他	0
8	人とのやりとり・トラブルの対応	14	保護者との連携		
9	けがの処置について	22	35	連絡帳の活用・書き方	16
10	その他	0	36	その他の連携	7
食に関すること			37	保護者との接し方	13
11	調乳・授乳について	17	38	その他	0
12	離乳食について	17	保育（教育）課程に関すること		
13	食事の介助・後始末の方法	6	39	年間・月間・週日案の立案・書き方	6
14	アレルギー対応	21	40	行事についての予備知識	17
15	お箸の持ち方・使い方	3	41	保育形態（担当制・縦割り保育）	8
16	その他	0	42	その他	0
排泄に関すること			遊びに関すること		
17	おむつ替え	8	43	手遊び	21
18	紙パンツについて	6	44	わらべうた	14
19	トイレトレーニングについて	22	45	未満児ができる遊び	27
20	トイレの誘い方について	12	46	2,3歳ができるゲーム	11
21	その他	0	47	制作遊び（教材として）	15
睡眠に関すること			48	手作りおもちゃ・制作（玩具として）	13
22	眠りに誘う方法	10	49	その他	0
23	午睡の環境について	6	その他		
24	その他	0	50	年齢に合った絵本の選択について	7
清潔に関すること			51	読み聞かせ方	5
25	沐浴について	11	52	授業を頑張っておけばよかった	10
26	身につける清潔について	5	53	言葉使い	6
27	その他	0	54	その他	0

乳児保育の困難さ・課題についての得点が高かったものに、「各発達段階の乳児理解について」「声がけの仕方」「注意の仕方」「人とのやりとり・トラブルの対応」「けがの処置について」「アレルギー対応」「トイレトレーニングについて」「発達に合わせた着脱の援助」「行事についての予備知識」「手遊び」「未満児ができる遊び」などが挙げられた。

2. 模擬保育のテーマ設定

「各発達段階の乳児理解について」は、保育経験の浅さから、発達段階のイメージ理解とそれに対する援助技術の未熟さがあると推測される。「人とのやりとり・トラブルの対応」では、子どものかかわりの中で起こることが予想されるであろう場面の基本的な援助を学ぶことで、似たような場面で臨機応変に対応する力を養いたい。それに加え「トラブルの対応」場面では、「注意の仕方」も含まれてくる。「けがの処置について」に関しては、小児保健など他教科との関連性があるのと乳幼児の環境に潜む危険予知・怪我の対応などについては、講義の中で丁寧に教授することとした。「行事についての予備知識」については、3歳以上の担任で多かった課題であり、保育内容＜環境＞指導法の分野の内容に当たる。また、勤務先の園の文化によるところも多いので、今回は省いた。子どもの生活の援助や遊びの関わりの中に「各発達段階の乳児理解について」「声がけの仕方」がすべて、関わっていることを考慮し、それを全体に加える形で、模擬保育のテーマに設定した。また、「未満児ができる遊び」が高得点であり、各年齢に応じた遊びや手遊びに絵本を含めた保育設定の活用も多いことが予想されるので、これらを含め、他の高得点の内容を合わせた課題を9つの模擬保育のテーマに設定した。

表2 模擬保育のテーマ

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 子ども同士のけんか、トラブル 2) トイレトレーニング、おむつ交換 3) 衣服の着脱援助・たたみ方指導 4) 手遊び、絵本 5) アレルギー対応や食事 6) 未満児の遊び、制作 7) 0歳児の遊び 8) 1歳児の遊び 9) 2歳児の遊び |
|---|

IV. 結論

今回の研究において、卒業生の保育現場における状況の調査を行なった。そこから見てきたのは、初任保育者の担当する保育は、0歳から2歳児クラスの乳児を複数の保育者と経験している割合が比較的高いということである。これは、三好・石橋(2006)の研究である初任保育者の担当クラスの現状の結果の0歳から2歳児クラスの乳児を複数の保育者と経験している実態をあげているものと同じ様な結果だといえる。

得られたデータから、課題や困難さを洗い出した。

「各発達段階の乳児理解について」は、勤務して3年未満の卒業生が多く、それ以降は、毎日の保育経験の積み重ねにより、理解されていくものと推測される。

また、「けがの処置について」に関しては、擦過傷やかみつきなど比較的けがの程度が軽く、起こる頻度の高いけがについては、初任保育者でも直ぐに判断・対応できる力を身につける必要がある。けがが起こったことに対し、保育者同士の連携や連絡・保護者に向けての対応について初任保育者は困難さを感じていると推測される。乳幼児の環境に潜む危険予知・怪我の対応などについては、常に細心の注意を払う姿勢が必要となり、他教科と教授する内容の連携が必要ではないかと考える。

近年アレルギーの子ども達が増加傾向にあり、保育現場において、直ぐに対応が迫られる。保育所保育指針解説書(2008)⁶⁾に記されているように、医師・保護者・保育者同士・栄養士との連携と共通理解が必要となり、忙しい保育中においても、正確な対応が迫られるので、困難さや課題を感じる内容だといえる。

「トイレトレーニングについて」「発達に合わせた着脱の援助」については、技術的なものもあるが、子ども一人一人の発達段階の見極め、子どもによってどこまで援助してよいのかという点に困難さを感じるということが予想される。子ども理解と保育技術が伴うことで、改善される内容である。

「手遊び」「未満児ができる遊び」などが挙げられたのは、日々子ども達と接していくなかで、いろいろと実践してはいるが、それでも、たくさんの引き出しが欲しいのではないと思われる。

また、「授業を頑張っておけばよかった」との回

答もみられ、保育現場で直面する課題に学生時代の学びの大切さを実感していることが伺える。

得られたデータから、具体的な9つの模擬保育テーマへと絞込むことができた。これを基に、在学生を対象として、実際の保育をイメージしやすい保育内容や指導の充実を図ることを目的に模擬保育を実施していきたいと考える。そして、保育者同士の連携・協働することの大切さをこの経験を通して、実感して欲しいという点にも重点を置いた指導をしていきたい。

謝辞

アンケートにお答えくださった卒業生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省.保育所保育指針解説書 (pp179－198), フレーベル館, 2008.
- 2) 厚生労働省.保育所保育指針解説書 (pp199－293), フレーベル館, 2008.
- 3) 三好年江・石橋由美 『初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題 新見公立短期大学紀要 27, (pp111－116), 2006.
- 4) 野中千都 「乳児保育Ⅱ」の教授内容に関する一考察～学生によるアンケート調査より～ 西南女学院大学紀要12, (pp146－172), 2008.
- 5) 船越利代子 “乳児保育”授業における課題—保育所実習アンケート分析から— 筑波国際短期大学紀要38, (pp1－15), 2010.
- 6) 厚生労働省. 保育所保育指針解説書 (pp172－175), フレーベル館, 2008.